変容のときに思う

中　山　雅　晴

昨年の新型コロナ感染拡大以来，私たちの生活は大きく変化している。そのひとつに，急速なオンライン化が挙げられる。

大学での講義は，今も感染状況によってオンラインになったり対面になったりを繰り返し，学生にはずいぶん我慢してもらっている。その一方で，会議は特に必要な場合を除き，オンラインが定着した感がある。これは分散キャンパスの本学にとっては，かなりの改善と言える。複数の事業所をもつ企業との打ち合わせでも，オンラインの方が喜ばれるようだ。支部の幹事会や各種行事についてもまた然りで，中国四国支部では交通の利便性が悪いこと（本支部に限ったことではないと思うが）がしばしば問題になっていたが，少なくともその問題はオンライン開催で解消された。

若手主体の行事等においては，対面の代替としてのオンラインではなく，オンラインならではの様々な工夫が試みられているようだ。そういえば，論文はずいぶん前からオンラインが主流になっていて，投稿の便利さやインパクトファクターを始めとする様々な数字情報をもたらしてきた。学会や学会誌のあり方の議論は本欄でも幾度か見たが，コロナ禍はさらに学会・支部活動の「見直しの機会」を与えることになった。

ところで，私が支部の一員であることを初めて実感できたのは，中国四国支部の若手セミナー（広島県・呉市）に参加した時だった。年齢はさほど変わらないが，すでに有名な先生と飲めるのは嬉しかった。分析化学講習会では暑い中，分析機器メーカーの方々に大変お世話になった。第 78 回分析化学討論会（2018 年）では，私が実行委員長を務めることになり，山口県宇部市を会場とした。主要駅からかなり離れた場所での開催に，「こんな不便なところに呼んで申し訳ない」という気持ちがあったのだが，多くの方から「こういう機会でもないと来られないですから」，と温かいフォローを頂き，とても感動した。これらすべて，対面での出来事である。

数日前，第 81 回分析化学討論会（山形大学）がオンラインで開催された。しかし発表予定の学生が出られなくなり，私が急遽代理で喋（しゃべ）ることになった。久しぶりであることに加え，講演時間が短いとあって，予想外に緊張が高まった。学生はいつもこんな感じなのかと同情し，冷や汗をかきながら発表を終えると，質疑応答に移った。聴衆からの質問はなく，座長の先生から質問を頂いた。「非常に興味深いご研究で…」という言葉を素直に受け取り，胸を撫（な）で下ろすとともに，とても誇らしい気持ちになった。その先生と私は，画面越しであったが，気持ちは確かに対面していた。

思えば，学会で前述のような言葉をかけて頂いたことは何度かあって，その度に励まされた。日々の実験を重ね，苦労して原稿を作り上げ，怒られながら何度も練習して発表に漕ぎつけた学生にとってはなおさらだろう。本人の成長はもちろん，足し合わせるとサイエンスの進展への寄与は計り知れない。たとえオンラインであっても，言葉は響く。

新支部長としては，学会・支部の運営などという高所からもっと定量的なことを書くべきだとは思うが，コロナ禍からアフターコロナの時代へ向かおうとしている今，真っ先に思い浮かんだ日本分析化学会と中国四国支部について述べさせて頂いた。

〔Masaharu NAKAYAMA，山口大学大学院創成科学研究科，
日本分析化学会中国四国支部支部長〕